

2018年MFTA[®]合格論文

価格変動における新値の更新回数によるマーケットの転換点の規則性

青山財産ネットワークス
岡本 教孝

要 旨

研究の焦点として、投資家が売買のタイミングを計るため、転換点（定義した表示期間内の最大値、最小値）から転換点への価格変動における新値（新高値、新安値）の更新回数の規則性を検証する。具体的な調査方法として、まず定義した算出方法で価格の転換点を求める。次に価格が転換点から転換点へと変動する中で新値を更新する毎に1つずつを加えた累積数を算出する。最終的にその数の規則性を導き出します。特性が異なる2つの対象指数で検証、日経平均株価指数と為替米ドル/円のそれぞれ日足、週足、月足とする。補足には転換点から転換点の騰落率を求め、新値の累積数との相関性も検証する。これらの検証の結果、ある数字の規則性で繰り返しマーケットが転換点を迎えていくことが証明することができれば売買のタイミングを計る際の優位性を高めることができる。加えて転換点を結ぶ騰落率と新値の更新回数との相関性を実証できれば更に優位性を高めることができる。これらの仮説の検証の元、研究結果を導き出していくこととする。

1. 序 論

1-1. 研究の背景

本研究に至った背景はリーマンショックが契機となる。筆者は当時、証券会社のリテール営業専門職（ファイナンシャルアドバイザー）に転職して3年目。予期することもできず何も対応することができなかつた。非常に悔しく自分のスキルのなさに情けない思いをした。

もし、自分に対応できるスキルが身につけていればお客様の資産を守ることができたはずだと痛感した。そんな時にテクニカル分析の重要性に気づいたのが背景にある。

1-2. 研究の目的と意義

テクニカル分析を研究することでお客様の資産を守ることができる。世の中にテクニカル分析の

重要性を伝え広めていき人々を豊かにすることが社会的な意義である。

1-3. 研究の問題意識

テクニカル分析において、掲げるデータの根拠を明確に示すことが課題であり遑って検証することが重要なことである。だれでもわかりやすくシンプルに示すことができ再現性のあるテクニカル分析を提示することが重要である。一見高度で難しそうな分析がより実践的かという疑問をもたざるを得ない。本研究ではより一般の投資家でもわかりやすく理解でき実践できるような分析を心掛けた。

参考にした文献は「新値累積数値」という分析手法で野村証券投資情報部が発信している考え方と「新値八手十手」酒田五法の考え方を軸に分析した。

1 「新値累積数値」はマーケットの天井や底（転換
2 点）を起点として新値（高値、安値）を更新する
3 毎に1つずつを加えた累積数が「7,9,11,13」の奇
4 数値、もしくは「22」によって変動が繰り返され
5 ることが多いという考え方である。そしてそのカ
6 ウントされた数値を繰り返す習性があるという考
7 え方である。「新値八手十手」は新値更新回数が
8 「8,10」で転換点を迎える考え方である。

9 ただ、研究していくにあたっていくつかの疑問
10 点にあたった。一つは転換点をどう定義するかで
11 ある。新値をカウントしていくにあたりどこを起
12 点とするかである。客観的な定義もなく、主観的
13 に起点を決めればいくらでも論点を変えることが
14 できるからである。

15 課題は客観的な転換点、つまりカウントする起
16 点の定義を定めること。規則的な数値で転換点を
17 迎えるのか。その数値の頻度、循環性を分析する。
18

19 1-4. 本論文の構成

20 本研究の内容は主に6章から構成される。第2
21 章は本研究において使用した資料とそれがどのよ
22 うにデータが集められたかといった、研究で使わ
23 れた方法を簡潔に列挙した。第3章では本研究で
24 発見したことを要約して結論を述べた。第4章に
25 ついては関連分野の文献などと比較しデータの分
26 析をした。第5章は分析から導いた追加研究を示
27 唆した。第6章は研究の課題や疑問、目的と発見
28 を最後に簡潔にまとめた。

30 2. 材料と方法

32 2-1. 資料

33 本研究の資料として特性が異なる2つの対象指
34 数で日経平均株価指数と為替米ドル/円を用いた。
35

36 ・日経平均株価指数

37 日経平均株価指数は以下の2つの媒体から引用
38 した。

39 ①株式会社 Quick が提供する「Quick Qr1 多機
40 能チャート」

41 ②株式会社日本経済新聞社が運営するウェブサ
42 イト「日経平均プロフィール」([https://indexes.](https://indexes.nikkei.co.jp/nkave)

[nikkei.co.jp/nkave](https://indexes.nikkei.co.jp/nkave))

・為替米ドル/円

為替米ドル/円は Investing.com (<https://jp.investing.com/>) USD/JPY - アメリカドル 日本
円の「過去のデータ」から引用した。

7 2-2. 方法

8 2-1 から取得したデータは Microsoft Excel2010
9 にデータを移行し分析した。

10 チャートの形状はローソク足とカギ足の2種類
11 でそれぞれ日足、週足、月足で分析した。

12 両チャートのサンプル数は以下のとおりで
13 ある。

14 日足 7,688、週足 2,160、月足 559

15 以下図1はローソク足、図2はカギ足の概要で
16 ある。

17 3. 結論

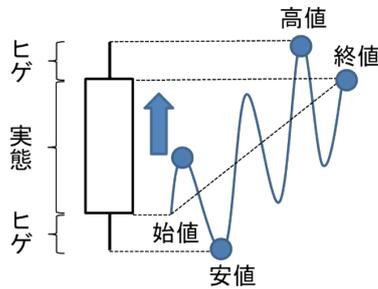
20 本研究の焦点である投資家が売買タイミングを
21 計るため、転換点（定義した表示期間内の最大値、
22 最小値）から転換点への価格変動における新値
23 （新高値、新安値）の更新回数の優位性のある規則
24 性を見つけ出すことはできなかった。価格が転換
25 点から転換点へと変動する中で新値を更新する毎
26 に1つずつを加えた累積数を算出しその数の優位
27 性のある規則性を導き出すことはできなかった。
28 特性が異なる2つの対象指数で日経平均株価指数
29 と為替米ドル/円の日足、週足、月足それぞれ同
30 じ習性がみられ、特段違いはなかった。

31 チャートの形状はローソク足とカギ足を用いた
32 が、ローソク足よりかはカギ足のほうが優位性の
33 ある規則性を見つけることはできた。ただそれが
34 特段優れている規則性とはいえない。本研究では
35 優位性のあるトレードの定義として検証成功確率
36 70%以上を求めた。いずれもそれに達していない。

37 補足で転換点から転換点の騰落率を求め、新値
38 の累積数との相関性も検証したが、特段新しい発
39 見はなかった。

40 本研究で新しい発見としてはカギ足チャートの
41 検証で陰陽転トレードが比較的高い優位性があっ
42 た。カギ足の陰陽転時に売買する手法でかつ更新

ローソク足

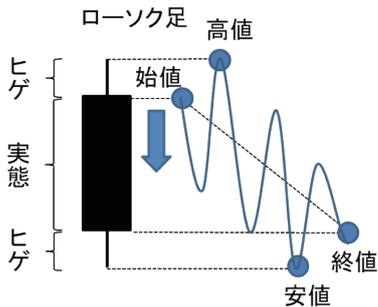


週足の場合 ザラバベース

	始値	高値	安値	終値
月曜日	19509.53	19509.53	19365.65	19393.13
火曜日	19373.11	19437.25	19361.95	19383.84
水曜日	19547.05	19561.32	19408.47	19434.64
木曜日	19366.36	19428.55	19351.92	19353.77
金曜日	19401.12	19485.97	19384.37	19422.61

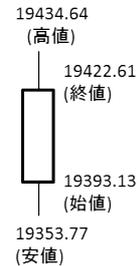


1日の4本値から週のローソク足をつくる



終値ベース

	始値	高値	安値	終値
月曜日	19509.53	19509.53	19365.65	19393.13
火曜日	19373.11	19437.25	19361.95	19383.84
水曜日	19547.05	19561.32	19408.47	19434.64
木曜日	19366.36	19428.55	19351.92	19353.77
金曜日	19401.12	19485.97	19384.37	19422.61



日々の終値から週のローソク足をつくる

図1. ローソク足の概要 (出典:「株価チャートの見方」(野村証券株式会社投資情報部 2017) を参考に筆者作成)

カギ足

- ・株価の騰落を1本の線の屈折で表示したもの
- ・時間の経過に関係なく株価変動だけを記入する「非時系列チャート」
- ・カギ足は、一定未満の不規則な株価変動を取り除き、株価のトレンドを見極めようとするものであり、そのトレンドが屈折、転換した場合にすばやくその動きをつかむことがポイントである。

50円(ある値段)カギ足

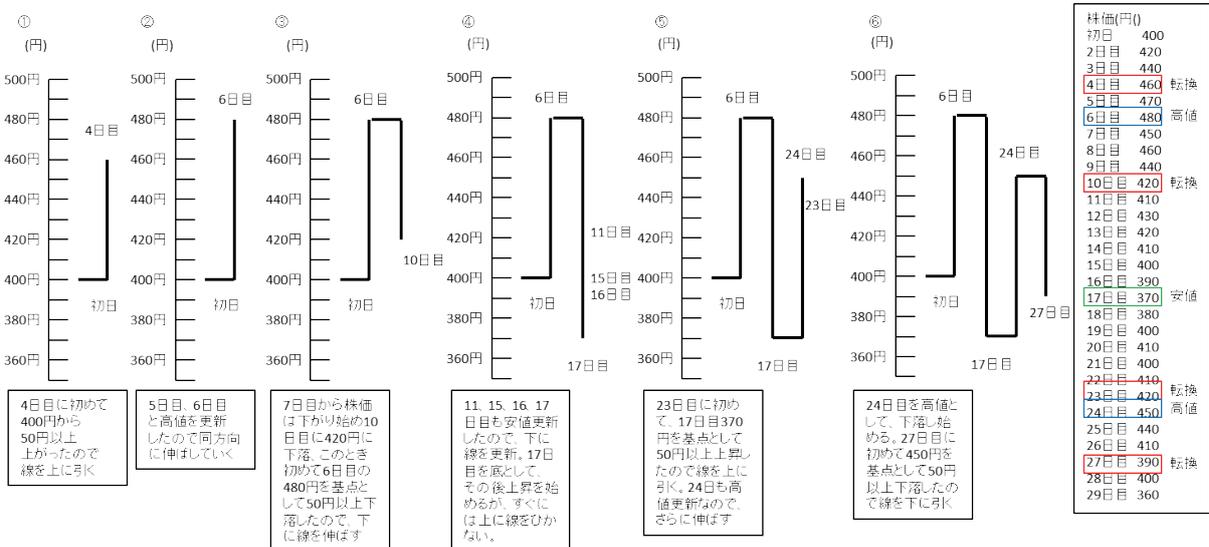


図2. カギ足の概要 (出典:「株価チャートの見方」(野村証券株式会社投資情報部 2017) を参考に筆者作成)

回数毎の値幅の特徴をつかむことで収益機会を高めることができる手法である。以上の結論は次章の考察で詳しく分析結果を述べる。

4. 考察

4-1. 新値の更新回数

4-1-1. 転換点

1) ローソク足の転換点

ローソク足は算出方法によって分析結果が大きく左右される。転換点の定義は以下のとおりである。「ある一定期間」内の最大値と最小値のこと。つまり、「ある一定期間」内の節目となる値とその日付のことである。転換点は最大値と最小値を交互に表示していくことになる。重要な点は「ある一定期間」の設定である。この「ある一定期間」の数値次第で分析する内容が大きく変化する。

詳細は図3～図7で説明する。用語の定義は以下のとおり。

- ある一定期間：n（転換点を算出する際の基準となる期間）

- 保持間：前回の転換点からある一定期間の終わりまでの期間
- 全期間：分析対象の全期間
- 最古：全期間の最も古いデータ

算出方法は以下のとおり。

- (1) 「ある一定期間」内の最大値と最小値を決める
全期間の最古からn期間の「ある一定期間」を作成する。次に「ある一定期間」の先頭から終わりまでのデータの中で最大値と最小値を決める。
- (2) 「ある一定期間」の次の値と比較する
「ある一定期間」内の最小値より小さい場合は保持間内のデータと次の値を含めた最大値を、「ある一定期間」内の最大値より大きい場合は保持間内のデータと次の値を含めた最小値を転換点とする。「ある一定期間」内の最小値もしくは最大値が転換点となるわけではない。次の転換点を決定できるまで「ある一定期間」を1つずつ移動していき、保持間内の最大値、最小値を更新する。

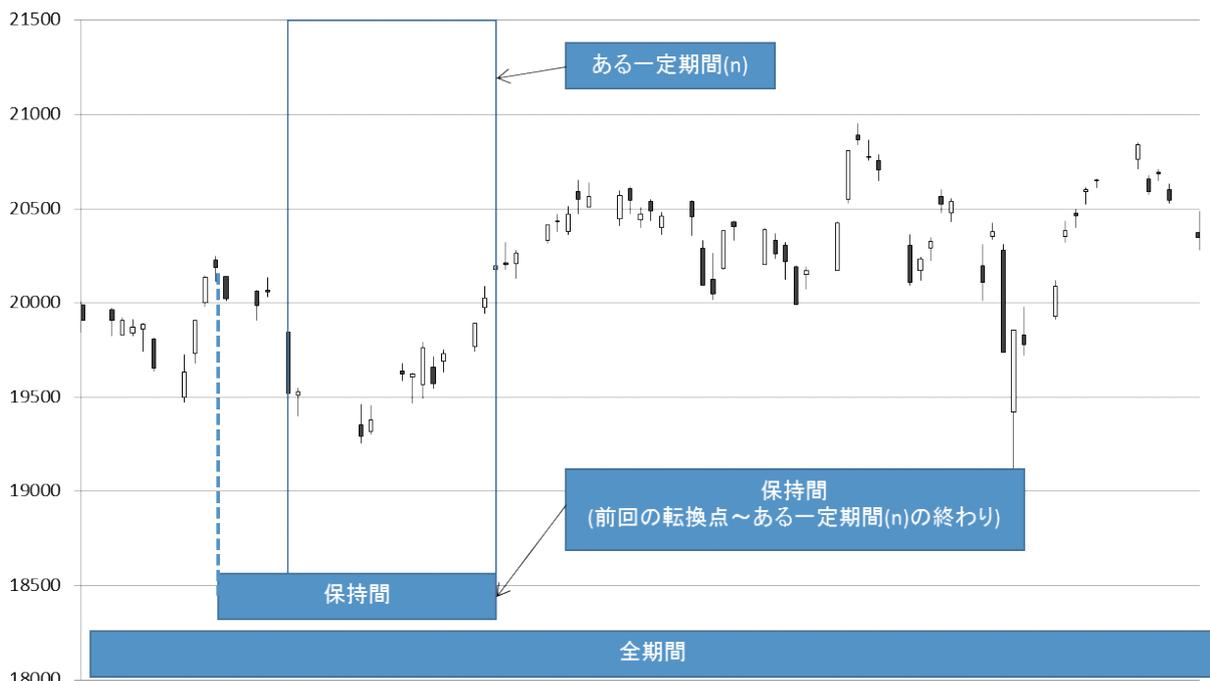


図3. 転換点概要①（出典：「転換点の定義と算出方法」多機能チャート（株式会社 Quick 2017）を参考に筆者作成）

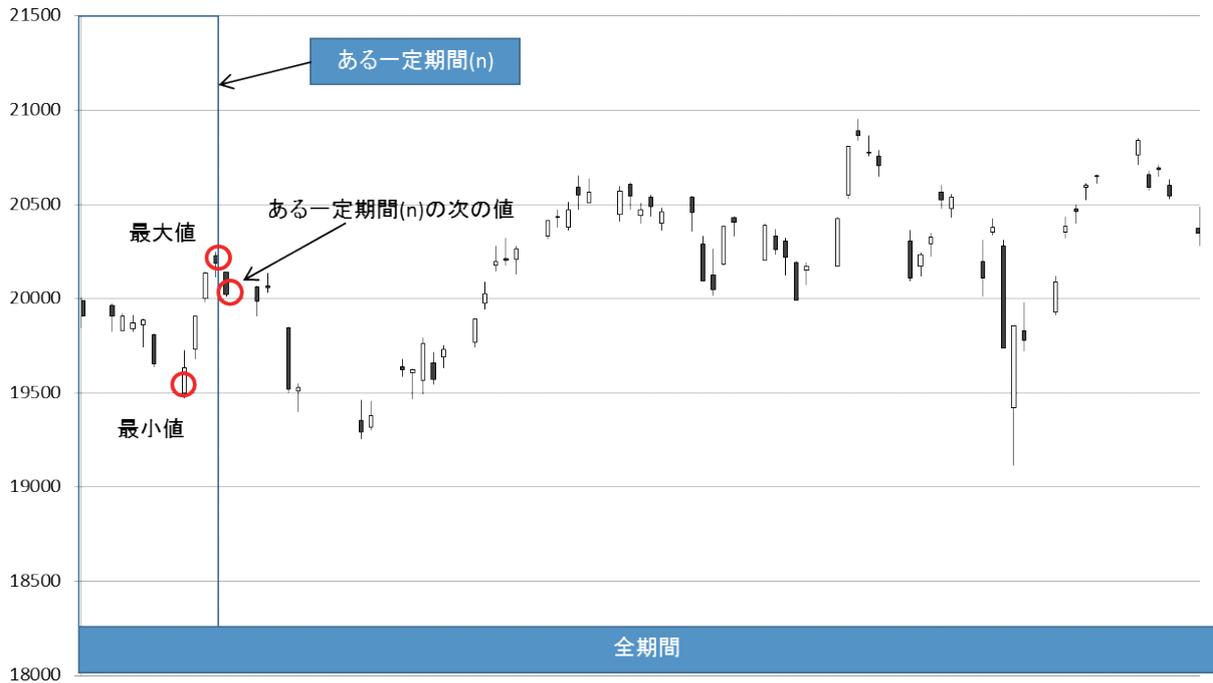
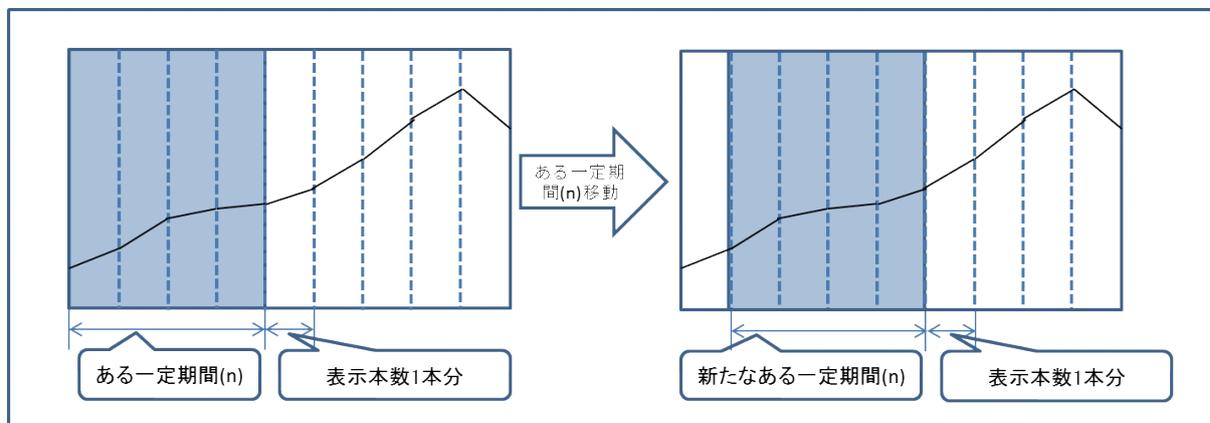
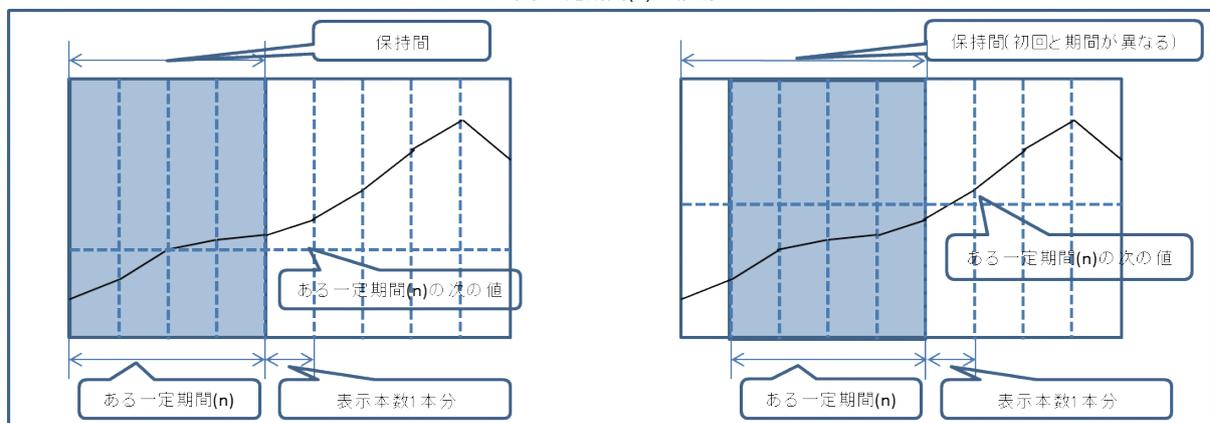


図 4. 転換点概要② (出典:「転換点の定義と算出方法」多機能チャート (株式会社 Quick 2017) を参考に筆者作成)



ある一定期間(n)の移動



保持間とある一定期間(n)の次の値との比較

図 5. 転換点概要③ (出典:「転換点の定義と算出方法」多機能チャート (株式会社 Quick 2017) を参考に筆者作成)

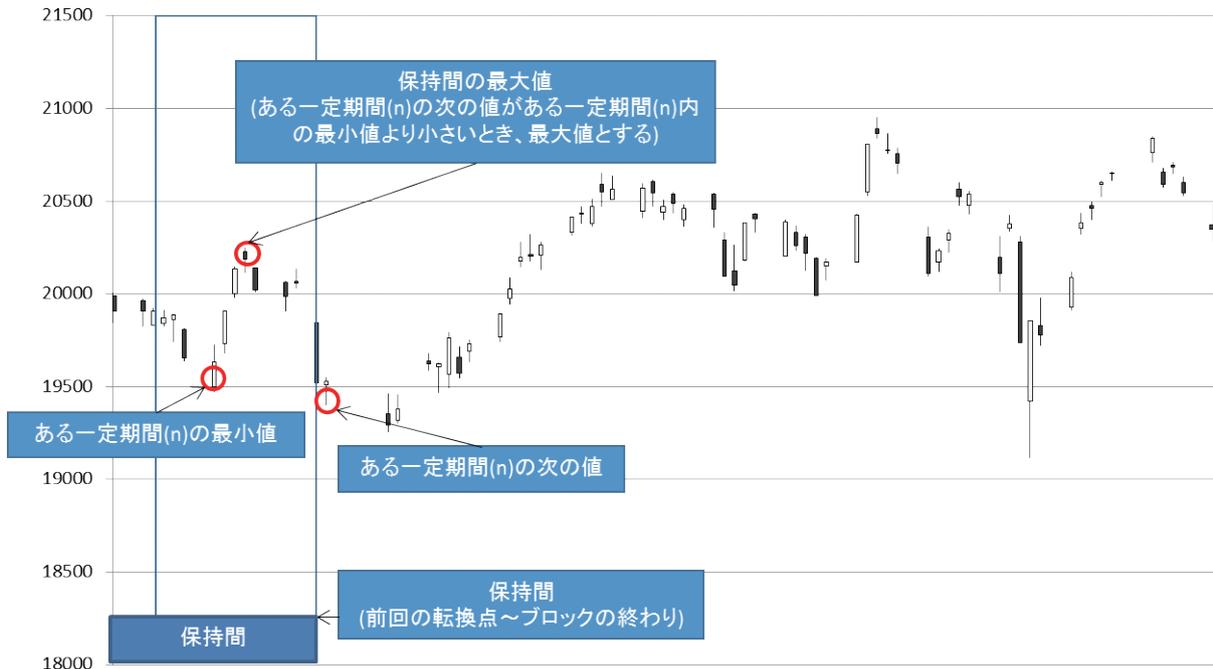


図 6. 転換点概要④ (出典:「転換点の定義と算出方法」多機能チャート (株式会社 Quick2017) を参考に筆者作成)

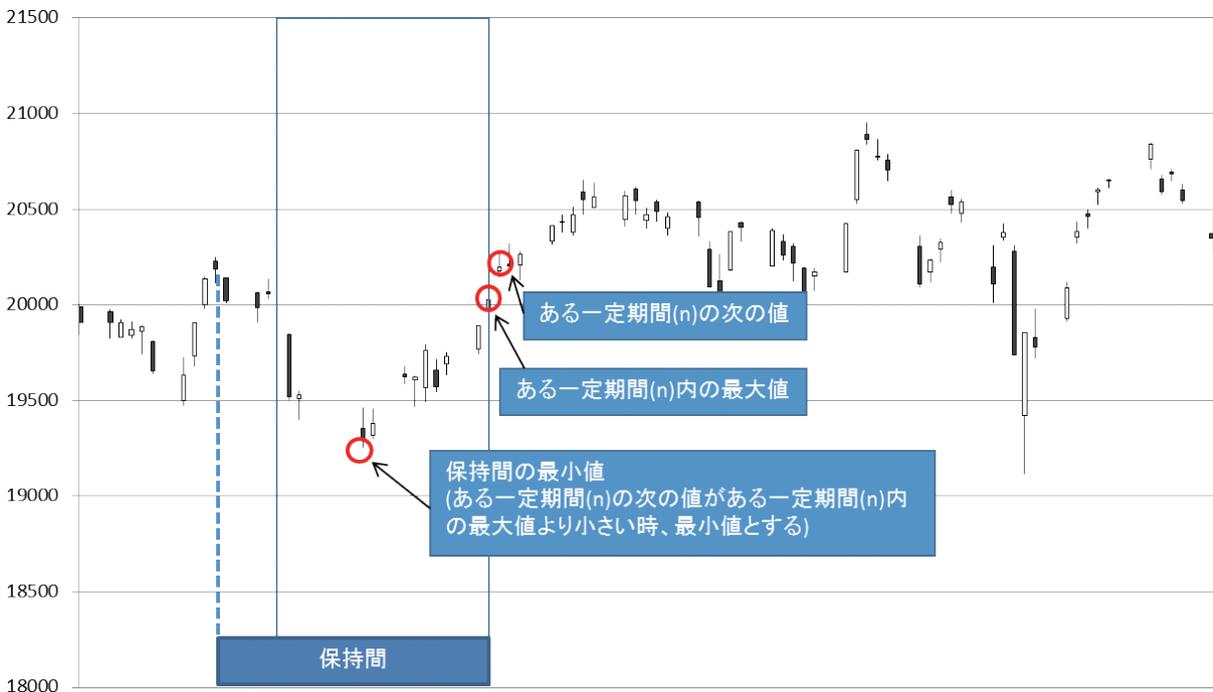


図 7. 転換点概要⑤ (出典:「転換点の定義と算出方法」多機能チャート (株式会社 Quick 2017) を参考に筆者作成)

38 (3) (2) を繰り返すこと

39 次の転換点を探す。なお前回の転換点が最大
40 大値の場合は最小値を、最小値の場合は最大
41 値を探す。

38 「ある一定期間」を1つずつ移動し、次の値が
39 「ある一定期間」内の最大値を決める場合は最小
40 値よりも小さくなるまで、最小値を決める場合は最
41 大値よりも大きくなるまで移動する。該当するタイ
42 ミングで保持間内のデータと次の値を含めた最

1 大値もしくは最小値を転換点とする。
 2 本研究では「ある一定期間」をn=10とする。
 3 根拠は株式会社 Quick 提供の多機能チャートのデ
 4 フォルト値であるため。
 5 ローソク足の新値更新回数を分析する上で転換
 6 点の「ある一定期間=n」の数字次第で結果は大き
 7 く異なる。「ある一定期間=n」が大きければ転換点
 8 が遅くなり新値の更新回数が大きくなる、小さけ
 9 れば転換点が早まり新値の更新回数が小さくなり
 10 頻繁に転換していく。要は投資家のスタンス次第
 11 で「ある一定期間=n」の数字の大小を変えるべき
 12 だろう。短期で投資するスタンスであれば「ある一
 13 定期間=n」の数字を小さく設定し、長期で投資す
 14 るスタンスであれば数字を大きくすれば良い。
 15 参考文献の「新値累積数値の見方」野村証券投資
 16 情報部と「新値八手十手」酒田五法については転換
 17 点となる起点の定義がはっきり明示されていない。
 18 この点が検証することを困難にしている。テクニ

カル分析の課題である。転換点の起点の取り方次
 第で何とでもいえることになるからである。

ローソク足の転換点を算出するには次の転換点
 が決まって初めて前の転換点が決まる。カギ足の
 ように予め転換点を事前に知ることはできない。
 この点がローソク足の弱点である。

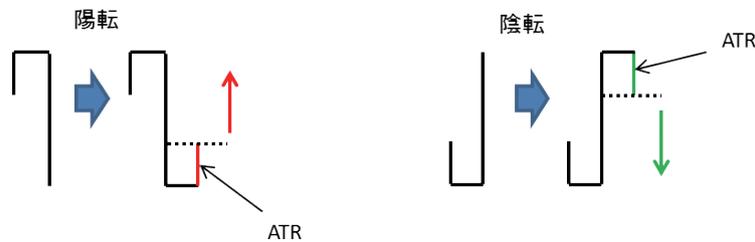
よってローソク足よりもカギ足のほうが優位性
 の高いトレードができる。ローソク足の新値の更
 新回数を分析する上で転換点の「ある一定期間=
 n」の数字次第で結果は大きく異なるという弱点が
 あるため。カギ足は転換点が予め事前に知ること
 ができ優位的にトレードできる点でローソク足よ
 りも優れている。

2) カギ足の転換点

図8のとおりカギ足の転換点はローソク足と
 違い、事前に転換点(値段)を知ることができる。
 ここが決定的に両チャートの優位性を分けるポイ
 ントである。

カギ足による株価の判断例

●陰陽転(反転したポイントをトレンド転換と捉える)



●転換点(過去の反転ポイントを抜けた地点をトレンド転換と捉える)

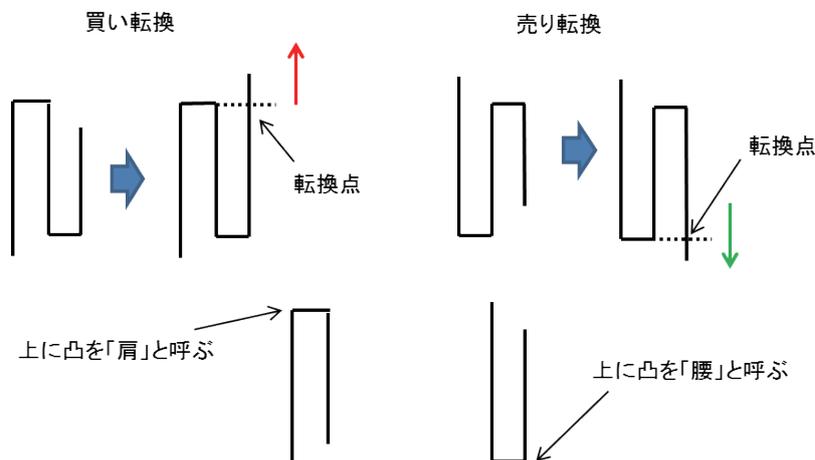


図8. カギ足 陰陽転と転換点 (出典:「株価チャートの見方」(野村証券株
 式会社投資情報部 2017) を参考に筆者作成

1 ローソク足では「ある一定期間=n」によって転
 2 換点に変化していた。カギ足は「ある値段」や「あ
 3 る率」の数字によって転換が形状される(図2で
 4 はある値段(50円)で説明した)。この「ある値
 5 段」や「ある率」の数値の大小がカギ足では非常に
 6 重要になる。本研究では「ある値段」を使用する。
 7 「ある値段」の定義は以下のとおりである。

13 ATR 計算式

- 14 1. 当日高値-前日終値
- 15 2. 前日終値-当日安値
- 16 3. 当日高値-当日安値
- 17 ①上記1~3を求める。最も高い値段を採用する。
- 18 これをTR(True Range)とする
- 19 ②当日のATR=(前日のATR×(全期間-2)+当日
- 20 のTR×2)÷全期間
- 21 ※直近のデータの比重を大きくするために当日の

TRを2倍している。
 各指標のATRは表1のとおりである。

4-1-2. 数え方

ローソク足の新値更新回数の数え方は起点とな
 る転換点から次の転換点までを(図9)のとおり数
 える。

カギ足の新値更新回数の数え方は(図10)のお
 り。転換点の買い転換後の肩の数、売り転換後の
 腰の数をカウントする。

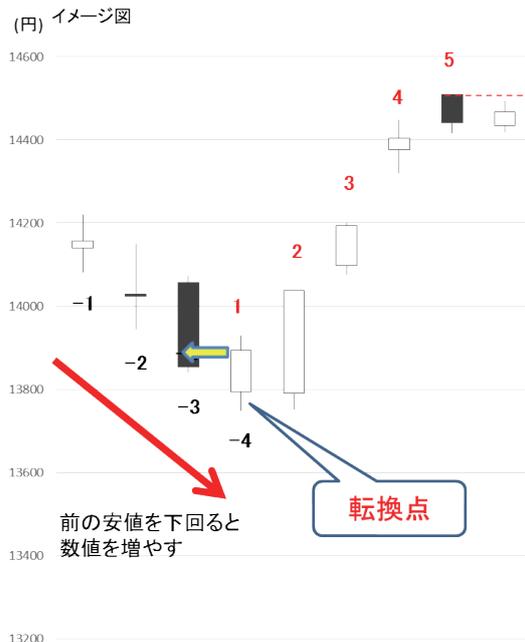
4-1-3. ローソク足

本研究の最大のテーマは、転換点がどんな数

表1. 各指標のATR

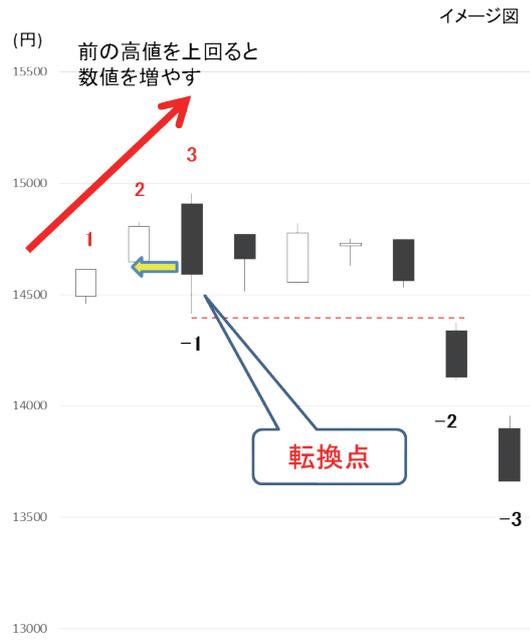
指標	ATR
日経平均日足	212
ドル円日足	0.94
日経平均週足	386
ドル円週足	2.21
日経平均月足	950
ドル円月足	4.79

数え方①(下落トレンド~陽転まで)



陽転(起点): 転換点の1つ前の安値を終値で
 上回った日

数え方②(上昇トレンド~陰転まで)



陰転(起点): 転換点の1つ前の高値を終値で
 下回った日

図9. ローソク足、新値の更新回数(出典:「新値累積数値の見
 方」(野村証券株式会社投資情報部 2017)を参考に筆者作成)

1 値の更新回数で規則的に転換しているかである。
 2 図 11、図 12 はサンプル数が多いローソク足の
 3 日経平均、ドル円それぞれ日足の新値更新回数で
 4 ある。
 5 参考文献の「新値累積数値の見方」野村證券投

1 資情報部の基本的数値「7,9,11,13 の奇数値」「22
 2 の超限界数値」で転換点を迎えたのは表 2 のとお
 3 り約 30% 前後の確率となった。
 4 「新値八手十手」酒田五法から表 3 のとおり約
 5 15% 前後の確率となった。

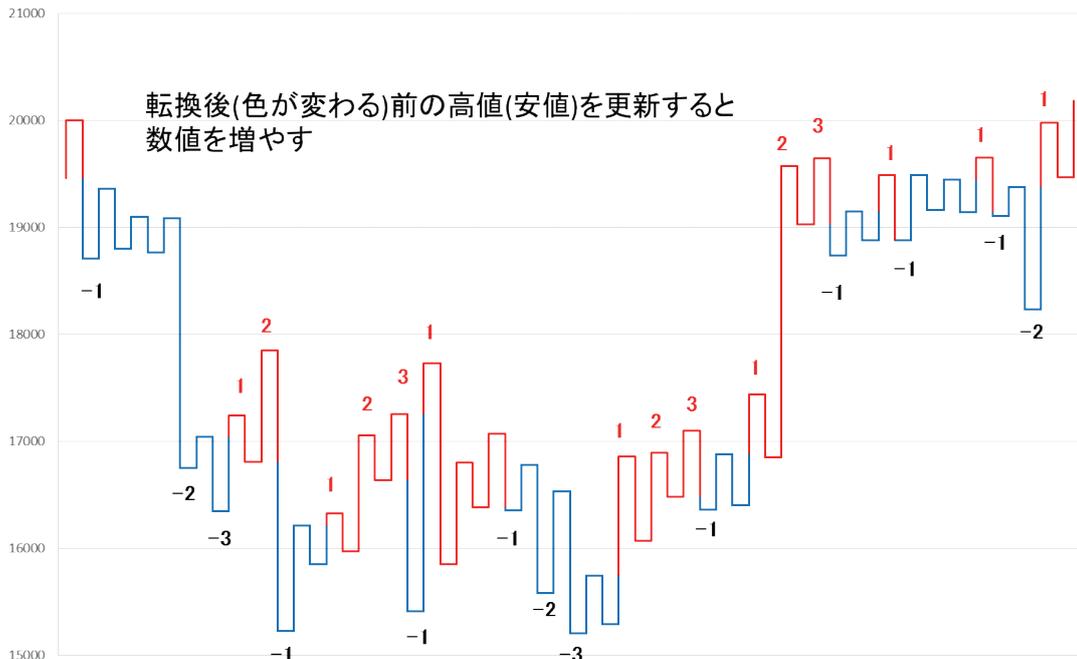


図 10. カギ足、新値更新回数の数え方 (出典：筆者作成)

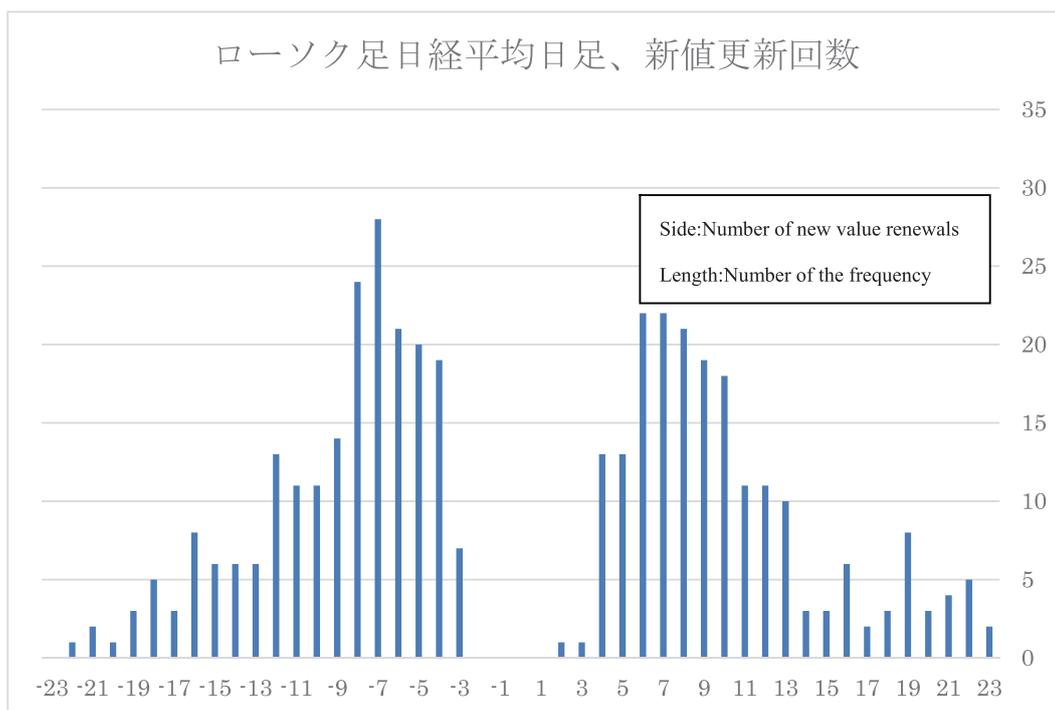


図 11. ローソク足日経平均日足、新値更新回数 (出典：日本経済新聞社より筆者作成)

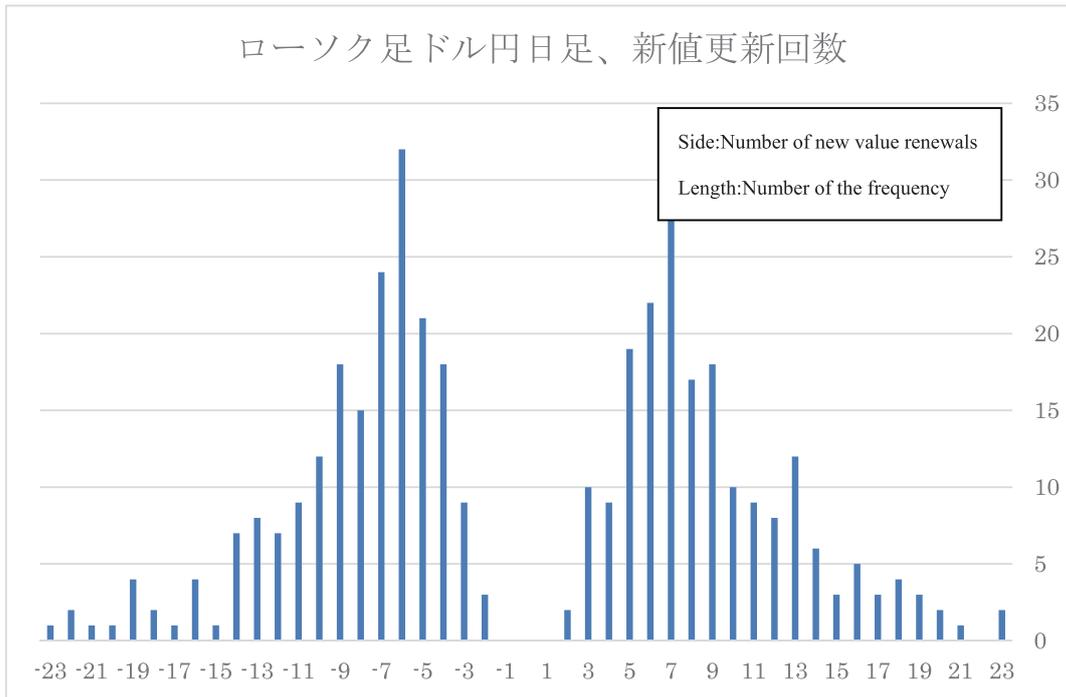


図 12. ローソク足ドル円日足、新値更新回数 (出典：日本経済新聞社より筆者作成)

表 2. ローソク足、新値更新回数「7,9,11,13,22」

指標	転換点	更新回数 「7,9,11,13,22」	比率
日経平均日足	427	127	29.7%
ドル円日足	407	129	31.7%
日経平均週足	112	31	27.7%
ドル円週足	106	25	23.6%
日経平均月足	20	10	50.0%
ドル円月足	18	7	38.9%

表 4. ローソク足新値更新回数「7～13」

指標	転換点	更新回数 「7～13」	比率
日経平均日足	427	219	51.3%
ドル円日足	407	196	48.2%
日経平均週足	112	48	42.9%
ドル円週足	106	50	47.2%
日経平均月足	20	13	65.0%
ドル円月足	18	9	50.0%

表 3. ローソク足、新値更新回数「8,10」

指標	比率	更新回数 「8,10」	比率
日経平均日足	427	74	17.3%
ドル円日足	407	54	13.3%
日経平均週足	112	14	12.5%
ドル円週足	106	13	12.3%
日経平均月足	20	3	15.0%
ドル円月足	18	3	16.7%

るとはいえない結果となった。

4-1-4. カギ足

カギ足はローソク足よりも転換が早く、野村証券投資情報部の「新値累積数値の見方」の基本的数値「7,9,11,13の奇数値」「22の超限界数値」や酒田五法には「新値八手十手」という数字は頻繁にみられなかった。図 13 図 14 のとおり新値更新回数「8」という数値が限界となった。

表 5 のとおり更新回数「1」で約 50% 前後、表 6 のとおり更新回数「1～3」で約 90% 前後となった。

ローソク足よりも数字にばらつきも少なく優位性は高いといえる。

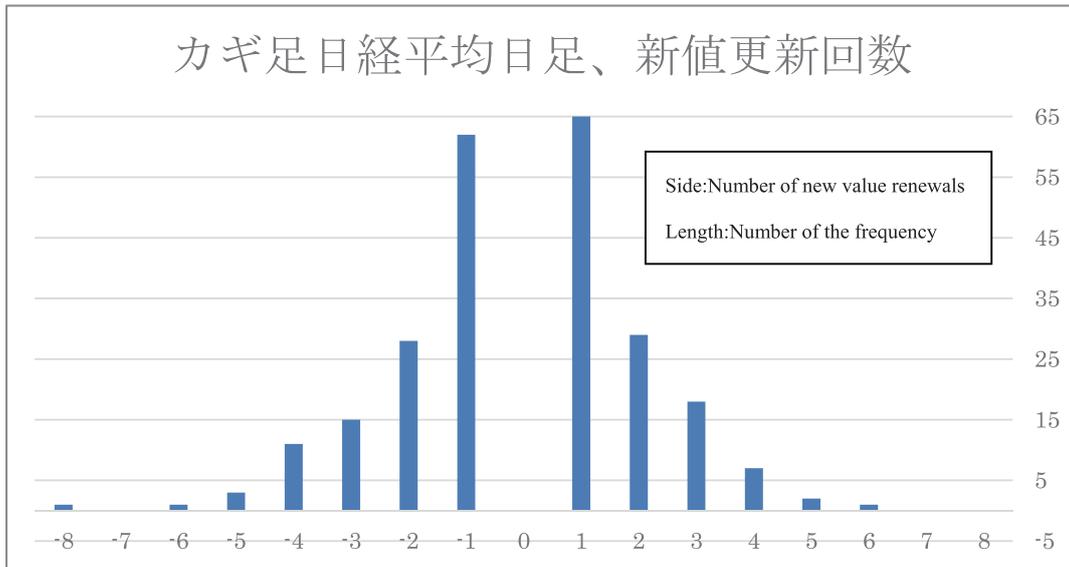


図 13. カギ足日経平均日足、新値更新回数 (出典：日本経済新聞社より筆者作成)

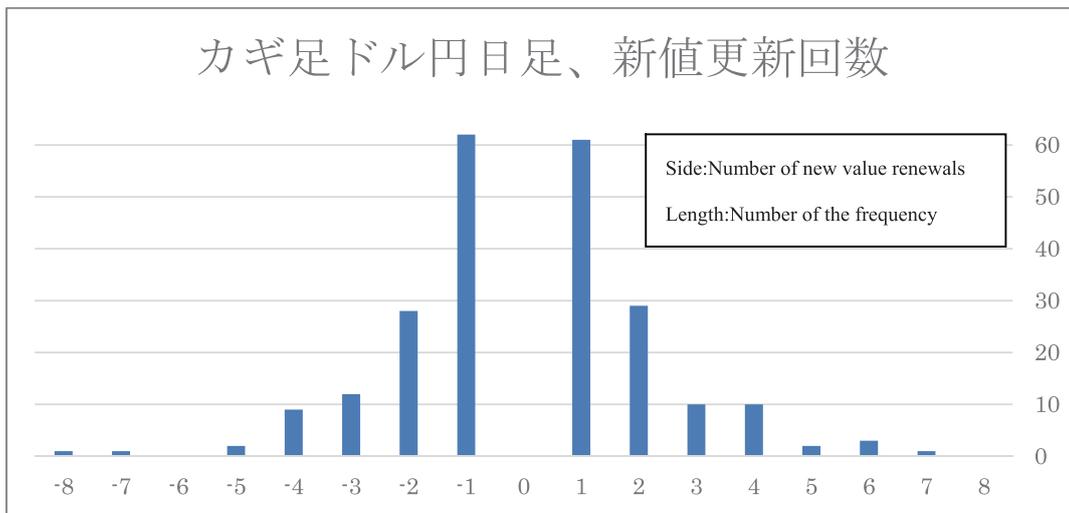


図 14. カギ足ドル円日足、新値更新回数 (出典：日本経済新聞社より筆者作成)

表 5. カギ足、新値更新回数「1」

指標	転換点	新値更新回数「1」	比率
日経平均日足	243	127	52.3%
ドル円日足	231	123	53.2%
日経平均週足	106	54	50.9%
ドル円週足	81	41	50.6%
日経平均月足	18	7	38.9%
ドル円月足	18	6	33.3%

表 6. カギ足新値更新回数「1～3」

指標	転換点	新値更新回数「1～3」	比率
日経平均日足	243	217	75.7%
ドル円日足	231	202	87.4%
日経平均週足	106	95	89.6%
ドル円週足	81	74	91.4%
日経平均月足	18	16	88.9%
ドル円月足	18	15	83.3%

4-2 新値更新回数の循環

4-2-1. ローソク足

参考文献「新値累積数値の見方」野村証券投資情報部によると、起点となる転換点からの新値更新回数と同数値で、次の転換点への新値更新回数

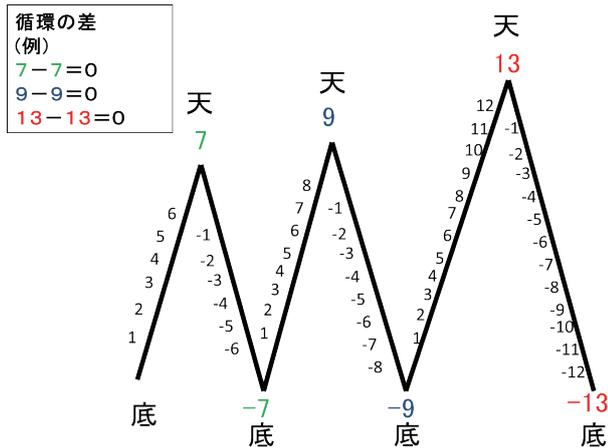


図 15. 新値更新回数の循環イメージ (出典:「新値累積数値の見方」(野村証券株式会社投資情報部 2017) を参考に筆者作成)

が繰り返されることが多いとある。図 15 がイメージ図となる。

以下の図 16、図 17 はローソク足の日経平均、ドル円それぞれ日足の循環の差である。循環の差とは前の更新回数と次の更新回数の「差」のことである。つまり「差」0 の場合、参考文献のとおり新値更新回数が同数値で循環しているといえる。

表 7 から差が「0」つまり同数値で循環しているのは約 10% 以下と低確率であることがわかった。範囲を広げて差が「0～4」の間でさえも、表 8 によると約 50% 程度の確率であり決して同数値で循環しているとはいえない。

よって決して優位性のあるトレードとはいえない結果となった。

4-2-2. カギ足

ローソク足と同じく、図と表で検証結果を示していきたい。

差が「0」、つまり同数値で循環しているのは表 9 のとおり、約 30% 前後でローソク足と比較するとカギ足のほうが優位性は高い。差が「0～

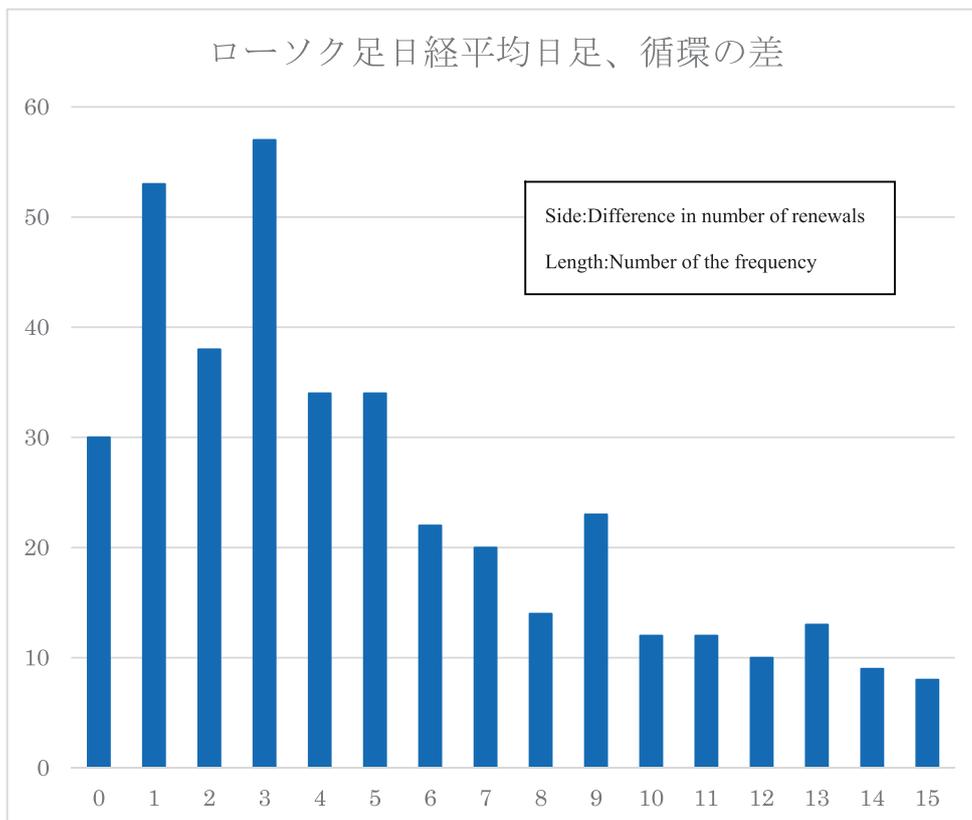


図 16. ローソク足日経平均日足、循環の差 (出典: 日本経済新聞社より筆者作成)

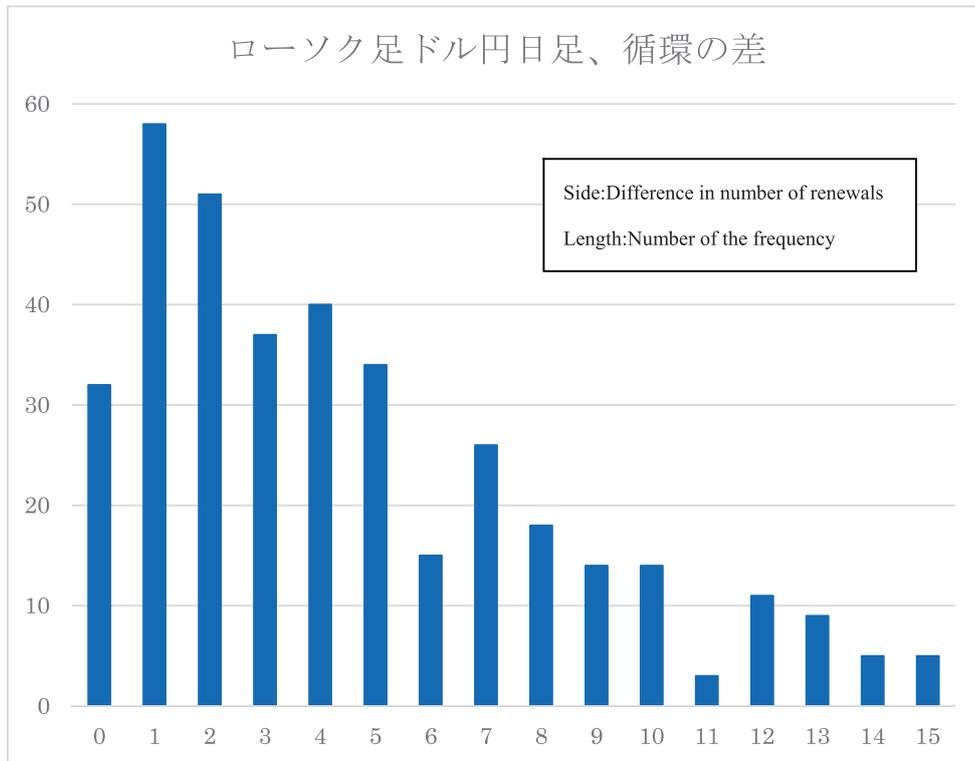


図 17. ローソク足ドル円日足、循環の差 (出典：日本経済新聞社より筆者作成)

表 7. ローソク足循環の差「0」

指標	転換点	循環の差「0」	比率
日経平均日足	426	30	7.0%
ドル円日足	406	32	7.9%
日経平均週足	111	5	4.5%
ドル円週足	105	2	1.9%
日経平均月足	19	2	10.5%
ドル円月足	17	0	0.0%

表 9. カギ足循環の差「0」

指標	転換点	循環の差「0」	比率
日経平均日足	242	86	35.5%
ドル円日足	230	84	36.5%
日経平均週足	105	36	34.3%
ドル円週足	80	28	35.0%
日経平均月足	17	5	29.4%
ドル円月足	17	7	41.2%

表 8. ローソク足循環数「0～4」

指標	転換点	循環数「0～4」	比率
日経平均日足	426	213	50.0%
ドル円日足	406	218	50.0%
日経平均週足	111	42	37.8%
ドル円週足	105	40	38.1%
日経平均月足	19	9	47.4%
ドル円月足	17	6	35.3%

表 10. カギ足循環数「0～4」

指標	転換点	循環の差「0～4」	比率
日経平均日足	242	236	97.5%
ドル円日足	230	220	95.7%
日経平均週足	105	104	99.0%
ドル円週足	80	75	93.8%
日経平均月足	17	16	94.1%
ドル円月足	17	17	100.0%

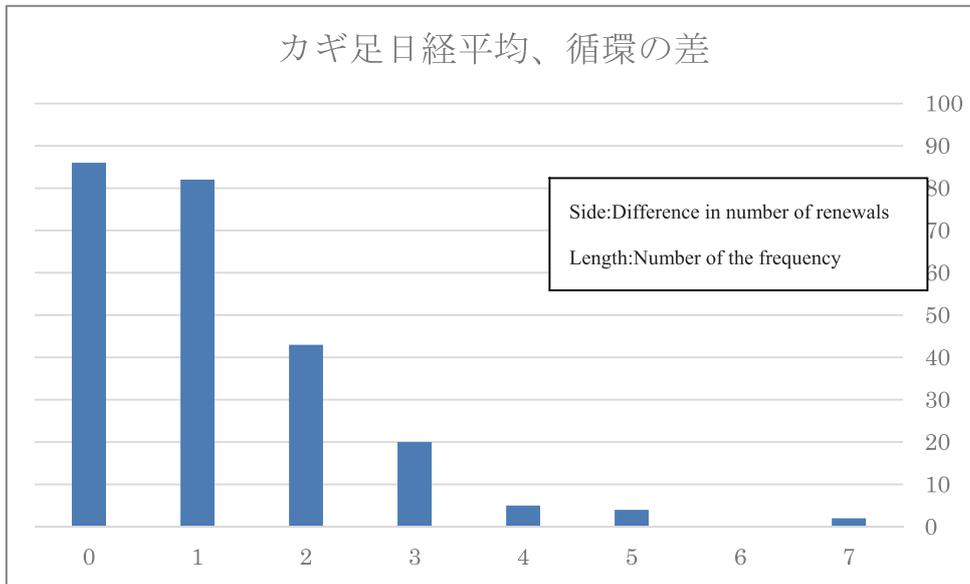


図 18. カギ足日経平均日足、循環の差 (出典：日本経済新聞社より筆者作成)

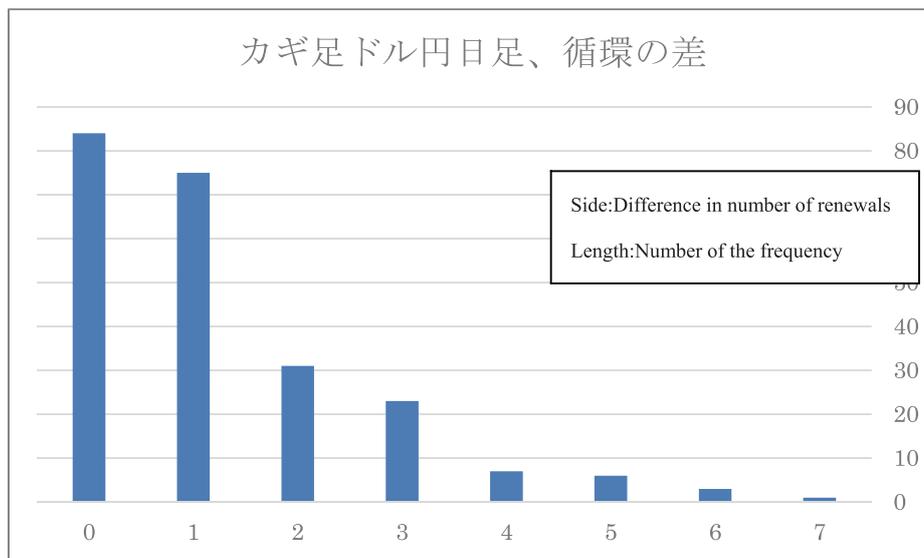


図 19. カギ足ドル円日足、循環の差 (出典：日本経済新聞社より筆者作成)

4] は表 10 のとおり約 90% におさまっておりローソク足と比較して圧倒的にカギ足優位である。しかし、転換してから最初の肩、腰で終了する確率が高いことから、収益機会が非常に限られてくる。カギ足の弱点としては売り時が難しい点がある。その売り時を何で補うかによっては優位なトレードができるといえよう。それについては後ほど検証する。

4-3. 新値更新回数と騰落率

騰落率の定義は単純に転換点から転換点までの上昇(下落)率。図 20 はイメージ図。新値の更新回数と騰落率の関係は図 21、図 22 のとおりである。

表 11 のとおり新値更新回数と騰落率の相関性は高い。

新値が 1 更新する毎に騰落率が何 % 変化していくか、表 12 に示した。



図 20. 新値更新回数と騰落率イメージ (出典：日本経済新聞社より筆者作成)

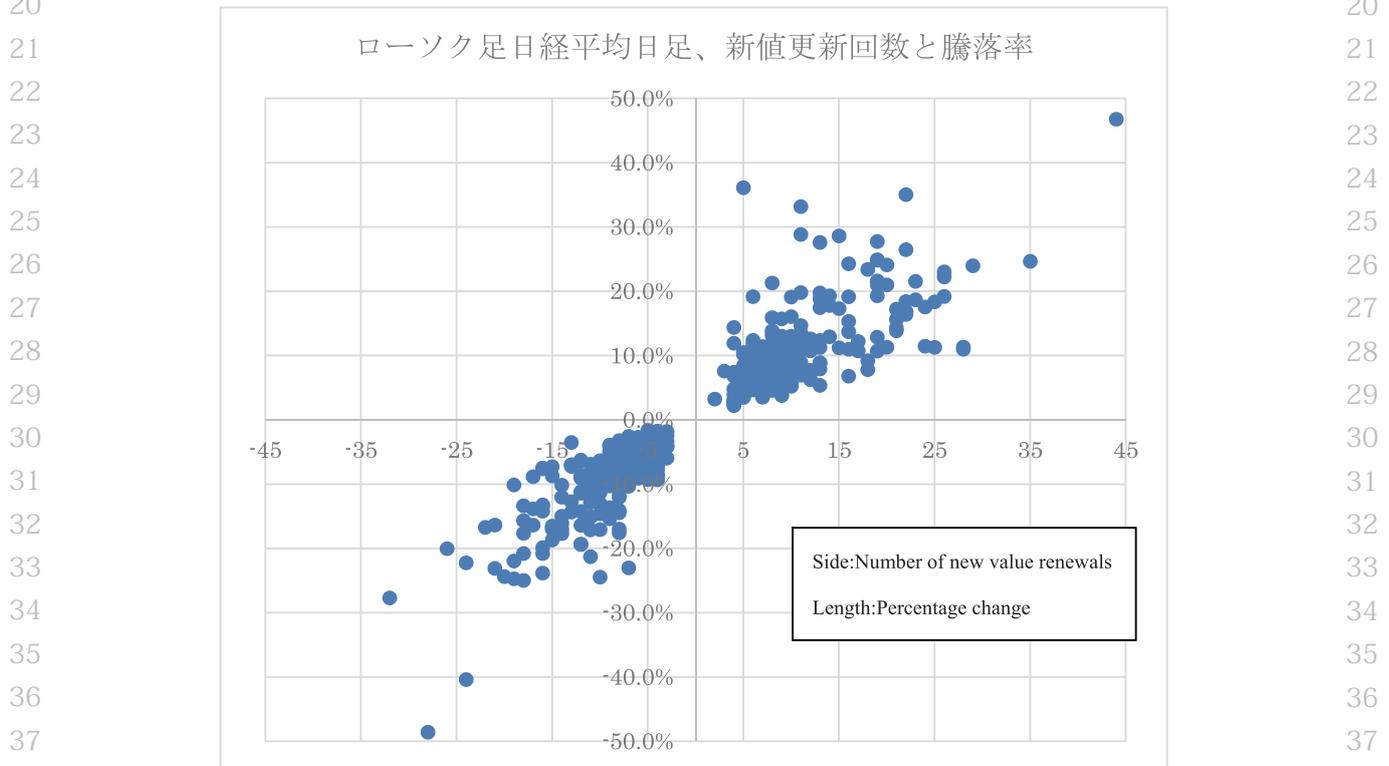


図 21. ローソク足日経平均日足、新値更新回数と騰落率 (出典：日本経済新聞社より筆者作成)

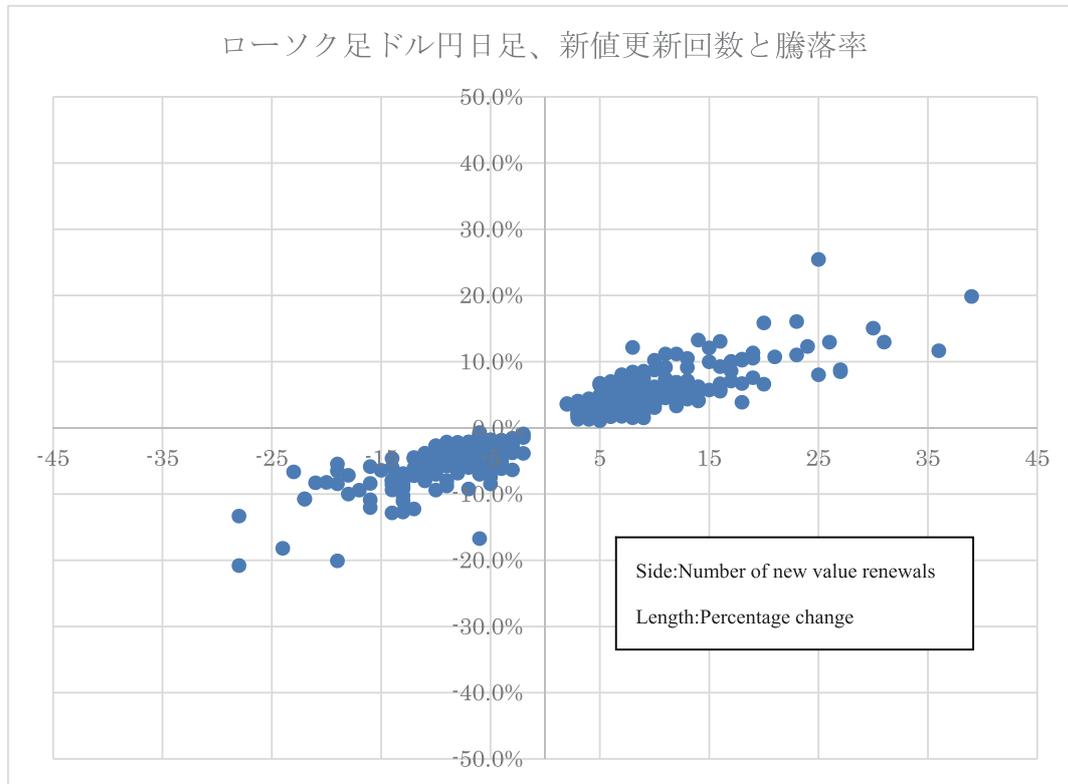


図 22. ローソク足ドル円日足、新値更新回数と騰落率 (出典：日本経済新聞社より筆者作成)

表 11. 新値更新回数と騰落率の回帰統計

指標	重決定 R2
日経平均日足	0.84
ドル円日足	0.86
日経平均週足	0.87
ドル円週足	0.91
日経平均月足	0.91
ドル円月足	0.90

表 12. 新値が「1」更新する毎の騰落率

指標	新値が「1」更新する毎の騰落率
日経平均日足	10.5%
ドル円日足	5.2%
日経平均週足	21.5%
ドル円週足	12.3%
日経平均月足	75.7%
ドル円月足	36.1%

日経平均がドル円の騰落率のほぼ倍となっている。

4-4. 新値の更新回数と調整率

調整率の定義は前の転換点から起点となる転換点の値幅に対する、起点となる転換点から次の転換点までの値幅の率となる。図 23 はイメージ図。

以下の図 24、図 25 のとおり新値の更新回数が大きいほど次の調整率は低くなる傾向がでた。長期トレンドの場面では一時的な押し目(戻り)を

あらわしていることになる。投資家としては新値の更新回数が小さい数字で転換した際、次の調整率が大きくなることを期待できる。

5. 新しい発見

今までの考察から新値更新回数における優位性のあるトレード検証は発見できなかった。しかし 1 点だけいえることはローソク足よりもカギ足のほうがトレードにおいて優位性が高いことである。

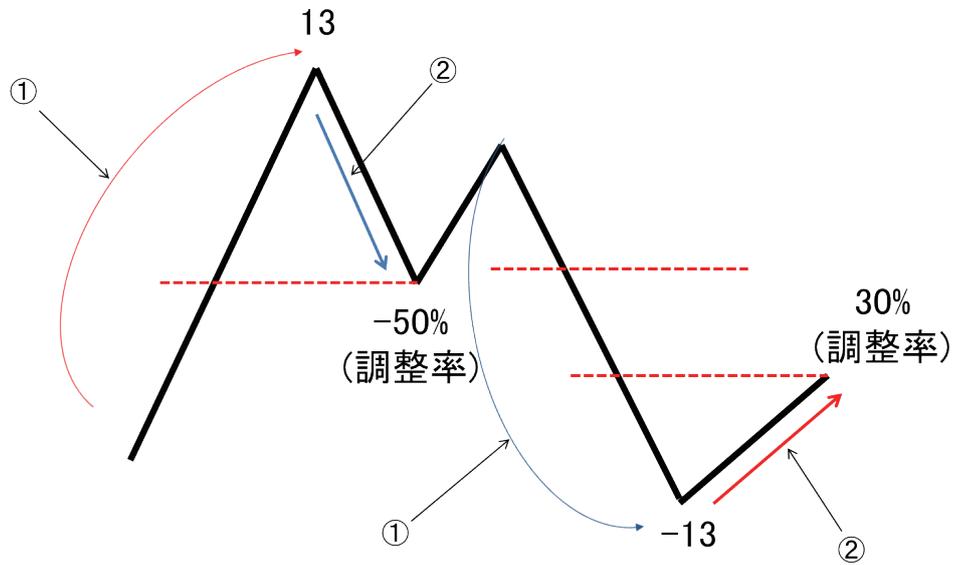


図 23. 新値更新回数と調整率イメージ (出典：筆者作成)

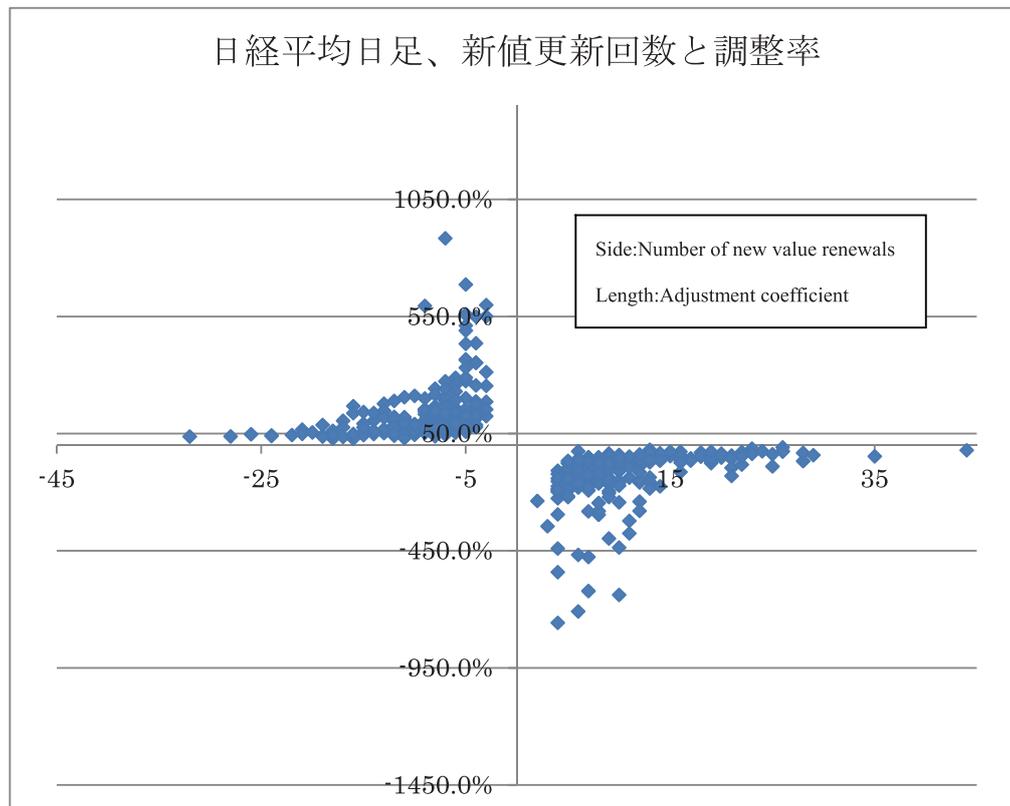


図 24. ローソク足日経平均日足、新値更新回数と調整率 (出典：日本経済新聞社より筆者作成)

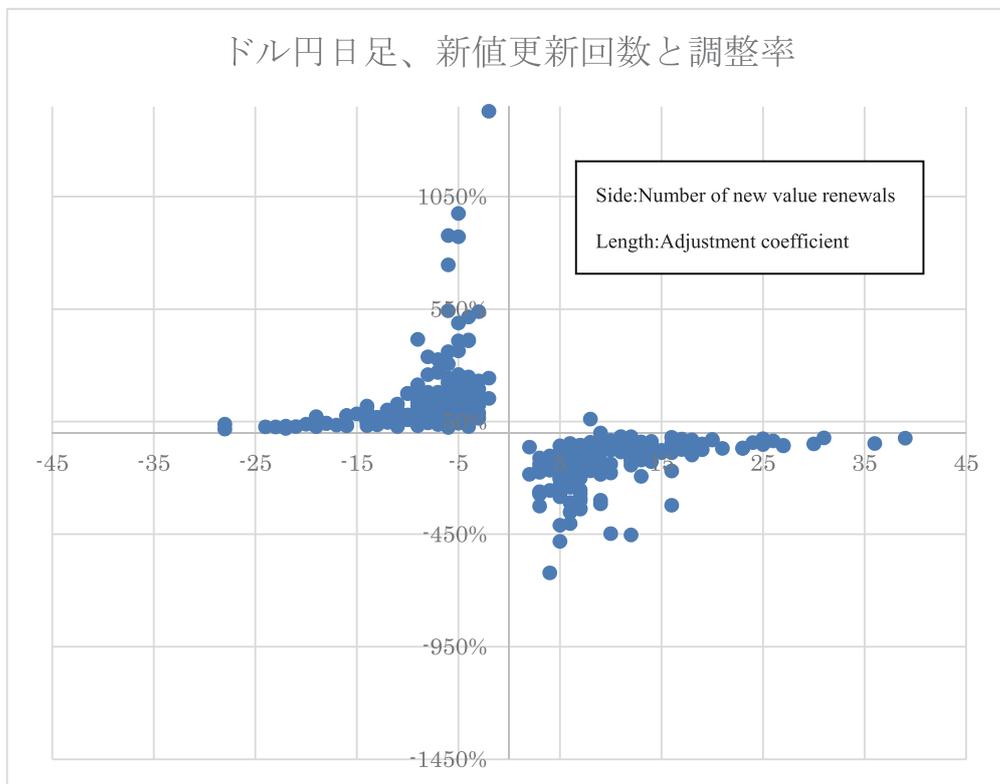


図 25. ローソク足ドル円日足、新値更新回数と調整率 (出典：日本経済新聞社より筆者作成)

そこであらためてカギ足のトレード検証を行う。

1) カギ足トレード検証

カギ足の利点は事前に転換点を知ることができることである。売買ポイントも明確でありトレードし易い利点がある。よって以下のとおりトレード検証を行った。結果、比較的優位性の高いトレードであることがわかった。

2) 転換点トレード

カギ足の転換点から転換点の売買をした時の結

果が表 13 である。勝率は約 50% ~ 60% である。RR (リスクリワード) レシオとは平均勝幅 ÷ 平均敗幅である。約 4 前後の結果で、平均的に 1 回あたり負けた値幅の約 4 倍勝利していることになる。期待値とは勝率 × 平均勝幅 - 負率 × 平均負幅である。期待値はいずれも + で指標の期間が長いほど値は大きくなっている。

3) カギ足陰陽転トレード (“オカショウ”)

カギ足が陽転、陰転した際に売買すると表 14

表 13. カギ足転換点トレード

指標	転換点	勝率 (%)	勝数	敗数	平均勝幅	平均敗幅	RR レシオ	期待値
日経平均日足	372	50.0	186	186	1023	-366	2.8	329
ドル円日足	290	49.7	144	146	3.87	-1.50	2.6	1.16
日経平均週足	105	51.4	54	51	2370	-597	4.0	929
ドル円週足	80	61.3	49	31	14.95	-3.15	4.7	7.94
日経平均月足	17	58.8	10	7	4109	-1293	3.2	1885
ドル円月足	17	64.7	11	6	30	-9	3.5	16.35

表 14. カギ足陰陽転トレード (“オカショウ”)

指標	転換点	勝率 (%)	勝数	敗数	平均勝幅	平均敗幅	RR レシオ	期待値
日経平均日足	897	68.0	610	287	540	-106	5.1	333
ドル円日足	711	60.6	431	280	2.07	-0.52	4.0	1.05
日経平均週足	245	67.8	166	79	1121	-218	5.2	689
ドル円週足	217	63.6	138	79	7.57	-1.31	5.8	4.34
日経平均月足	49	69.4	34	15	3092	-561	5.5	1974
ドル円月足	51	82.4	42	9	15	-3	4.5	11.38

の結果となった。勝率は60%～82%であり転換点トレードと比較すると他の項目数値も上回っている。よって優位性が高いトレードといえる(カギ足陰陽転トレード (“オカショウ”) の詳細は図 27 を参照)。

以上の検証から優位性が高いトレードが証明できた。特にカギ足陰陽転トレードが極めて優位性が高いといえる。これに加えてカギ足の弱点である。売り時のタイミングを補えばより優位性が高くなるだろう。

それぞれ転換点後の新値更新回数毎の過去の平均獲得値幅を算出し、それを参考にしてトレードすれば負ける確率も低くなり総体的に期待値も高くなるだろう。

表 15 のとおり更新回数が2回目の際に比較的大きく値幅が取れている。逆に1回目(転換直後)

の値幅は小さいことがわかった。よってカギ足陰陽転トレードで狙い目は2回目の肩や腰を形成する際に大きなトレードチャンスがある。

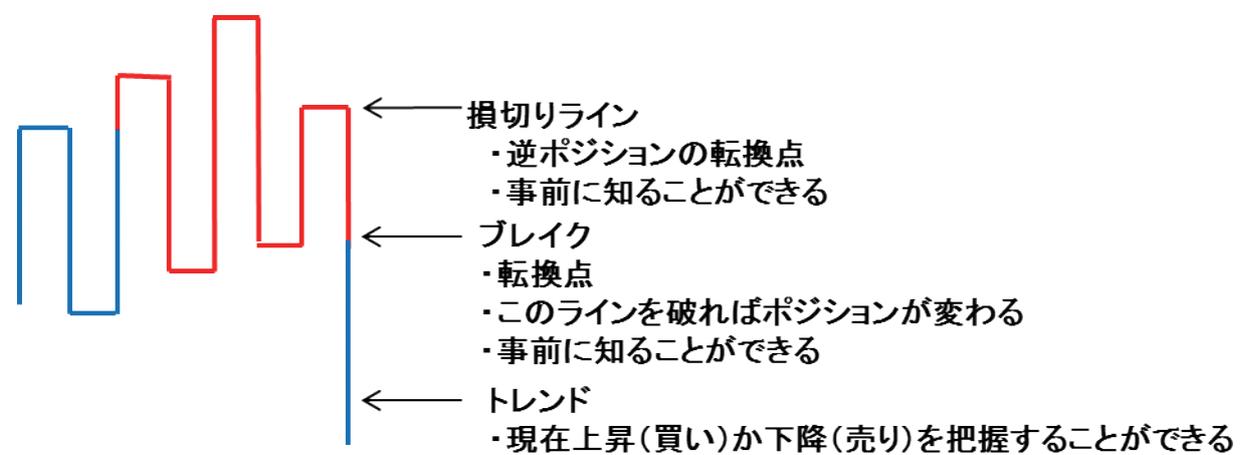
カギ足陰陽転トレードは筆者のニックネームから (“OKASHOW”) と命名した。

以上から、本研究で新しいアイデア、投資手法を創り出すことができた。

以下述べる投資で成功するポイントをカバーすることができるのがカギ足陰陽転トレード (“オカショウ”) である。

投資で負ける主な原因は以下の2つである

- ・逆方向のポジションを保有し続けること(トレンドに逆らう)
- ・「こつこつドカン」(損大利小) 薄利で売り、大きい損で売る



カギ足はこの重要な3つのポイントを教えてくれるチャートである

図 26. 投資の重要な3つのポイントとカギ足の利点 (出典：筆者作成)

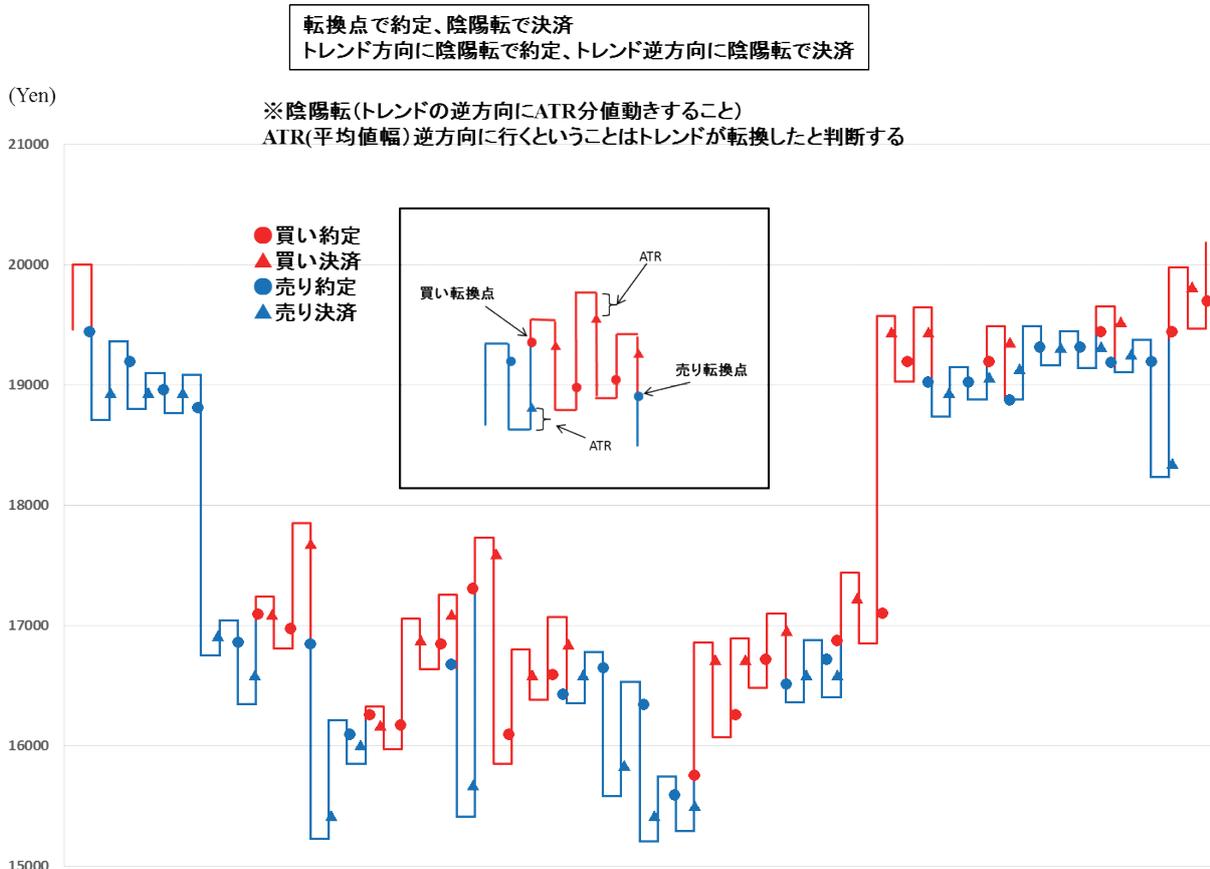


図 27. カギ足陰陽転トレード (“オカショウ”) (出典：筆者作成)

表 15. カギ足陰陽転各新値更新回数毎の平均獲得値幅

新値更新回数	日経平均日足	日経平均週足	日経平均月足	ドル円日足	ドル円週足	ドル円月足
3	345	621	4464	0.96	1.77	6.28
2	446	1047	3061	0.90	4.50	13.13
1	-31	304	304	-0.22	0.60	2.50
-1	24	294	371	0.11	-0.10	17.57
-2	425	571	2536	0.90	6.80	19.83
-3	307	758	1463	0.43	1.73	1.53

逆にいうと上記の逆の行動をとりさえすれば成功するのである。

カギ足陰陽転トレード (“オカショウ”) は上記2つを克服することができる。

図 26 のとおり投資で成功するポイントは以下の3つである

- ・トレンド
- ・ブレイク
- ・損切り

最初にトレンドを見極め、転換点をブレイクすればトレンドが転換する値段を確認し損切りの値段を事前に把握することがポイントである。

この3つのポイントをすべてカバーすることができるのがカギ足陰陽転トレード (“オカショウ”) である。

3つのうちで一番重要なのは損切りである。すべては損切りラインから考えなければならない。

なぜならば損切の幅から利益確定ラインをリスクワードの観点から考えなければならないから

1 である。
 2 投資する事前に投資家が決めておかなければい
 3 けないのは以下3つの値段である。

- 4
- 5 ・エントリーポイント
- 6 ・損切りポイント
- 7 ・利益確定ポイント
- 8

9 どの値段で約定するか、エントリーポイントで
 10 約定すれば自ずと損切ポイントが決まり、エント
 11 リーポイントと損切ポイントの幅から利益確定
 12 ポイントを決めていく順序で考えなければなら
 13 ない。

14 5-1. 補 足

15 5-1-1. 投資の流れ

16 1回あたりの投資額を決定してからカギ足陰陽
 17 転トレード("オカショウ")までの流れ。

- 18
- 19
- 20 1) 金融資産と負債を把握し、純金融資産を算出
 21 する
 22 計算) 金融資産-負債=純金融資産
 23 例) $100,000,000-10,000,000=90,000,000$
- 24 2) 純金融資産から投資予定額を自身で決定する
 25 計算) 投資予定額
 26 例) $50,000,000$
- 27 3) 1回あたりの投資で許容できるリスクを算出
 28 する
 29 計算) 投資予定額×1回あたりの投資で許容で
 30 きるリスク(%)
 31 例) $50,000,000 \times 1\% = 500,000$
- 32 4) 投資する商品を選定し、その商品のATRを算
 33 出する
 34 計算) 商品のATR
 35 例) トヨタ自動車株 ATR=87円
 36 (2017/8/17 現在)
- 37 5) ユニットを算出
 38 計算) $1回あたり許容できるリスク額 \div (ATR$
 39 $\times 売買単位)$
 40 例) $500,000 \div (87 \times 100) = 57$ (少数第1位
 41 を四捨五入)
 42

- 6) 1回あたり投資できる株数を算出
 計算) ユニット×株数
 例) $57 \times 100 = 5700$
- 7) 1回あたり投資できる金額を算出
 計算) 6) で算出した株数×株価(トヨタ自動
 車 2017/8/17 終値)
 例) $5700 \times 6175 = 35,197,500$
 1ATR=87の変動はリスク許容額となる
 $35,197,500 \times (87 \div 6175) = 495,900$
 (少数第1位を四捨五入)

カギ足陰陽転トレード("オカショウ")はATR
 逆方向いった際に決済することからATRを軸にリ
 スク管理、資金管理ができる優れた手法であるこ
 とが証明できた。

6. 要 約

本研究の課題や疑問、目的と発見を最後に簡潔
 にまとめた。

課題はローソク足の転換点の定義のように、設
 定する数値次第で新値更新回数の数が大きく変わ
 る。要はテクニカル分析全般にもいえるが分析が
 主観にどうしても傾いてしまうことである。主観
 を排除しデータの根拠を示し誰にでもわかる手法
 を提示できるかどうかは課題である。

より複雑で難解そうな分析をすることが決して
 優位性の高い分析といえるかどうかは疑問であ
 る。投資は負けを小さく勝ちを大きくすること、
 シンプルである。よってトレード手法もシンプル
 でわかりやすくあるべきだと思う。本研究の目的
 はだれにでもわかりやすく実践的で結果が出せる
 手法を提示することだった。その観点からいえば
 カギ足陰陽転トレード("オカショウ")を発見で
 きたことは大きかった。売買ポイントがわかりや
 しく明示され転換点のポイントも事前に知ること
 ができる。転換点はATRでだれもが客観的に定
 義できる。期待値が高く優位性のあるトレードで
 ある。

投資はひたすらリスクリワードを高めることに
 努めることを繰り返し、期待値を高くすることな
 のだから。

1 謝 辞

2 このような研究の機会を設けて頂いた国際テク
 3 ニカルアナリスト連盟に感謝申し上げます。そし
 4 て日本テクニカルアナリスト協会のご協力頂いた
 5 関係者の皆様に感謝申し上げたい。特に事務局の
 6 方々には色々ご配慮を頂きありがとうございます
 7 ました。そして温かく見守って頂き、いつもどんな時
 8 も応援してくれた職場である野村證券株式会社立
 9 川支店の同僚に感謝申し上げます。何よりこの研
 10 究を完成させるにあたり多大なるサポートをして
 11 頂いた早稲田大学の鈴木理希也氏には感謝しきれ
 12 ない。鈴木氏がいなければこの論文は完成しなかつ
 13 たことは間違いない。精一杯の感謝の気持ちを表
 14 現したいと思います。本当にありがとうございました
 15 た。この研究が世界中の投資家の皆さんに少しで
 16 もお役に立てるようならばこの以上の喜びはない。

17 ●プロフィール

18 岡本教孝 MFTA®、MBA

19 株式会社青山財産ネットワークス
 20 事業承継コンサルティング事業
 21 本部 第二事業部 第二グループ 相
 22 続・事業承継コンサルタント。
 23 前職 野村證券株式会社。支店に
 24 てテクニカルセミナーを100回
 25 以上開催。社長賞等数々の賞を受
 26 賞、野村證券現職初のMFTA®取
 27 得。奈良県北葛城郡王寺町出身、
 28 奈良県私立天理高等学校卒業、学習院大学経済学部経
 29 営学科卒業(日本初の体育会フットサル部「学習院輔仁
 30 会大学支部フットサル部」創設者)、早稲田大学大学院
 31 商学研究科専門職学位課程ビジネス専攻(MBA)卒業
 32 (商学研究科初の公認サークル「WBS フットサル部」創
 33 設者)



7. 参考文献

4 新値累積数値の見方(野村證券株式会社 投資情
 5 報部 2017) 6
 6 株価チャートの見方(野村證券株式会社 投資情
 7 報部 2017) 8
 8 酒田五法は風林火山-相場ケイ線道の極意(日
 9 本経済新聞社 2004) 10
 10 Quick Qr1 多機能チャート(株式会社 Quick
 11 2017) 12
 12 日経平均プロフィール(<https://indexes.nikkei.co.jp/nkave>)(日本経済新聞社 2017) 13
 13 Investing.com(<https://jp.investing.com/>) 14
 14 (Investigate 2017) 15
 15 Qr1 多機能チャート~転換点の定義と算出方法 16
 16 ~ (株式会社 Quick 2017) 17
 17 小次郎講師流 目標利益を安定的に狙い澄まして 18
 18 獲得 真・トレーダーズバイブル-V トレーダー 19
 19 になるためのルール作り(小次郎講師 2016) 20
 20 日本テクニカル分析大全(日本テクニカルアナ
 21 リスト協会 2017) 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42